

NPO法人

全日本語りネットワーク

〒376-0006 群馬県桐生市新宿 1-4-33

(Fax) 0277-43-8225 (振替) 00130-2-114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) http://japankatarinet.jp/

2016. 1. 30 発行

ニュース

怪談のまち、ご縁のまち、松江へようこそ

島根県立大学短期大学部教授 小泉 凡

妖怪のまち境港、神話と神々のまち出雲、そこに挟まれた松江は怪談のまち。そんな伝承文学とのゆかりを地域の矜持として、地域文化の創造に取り組む近年の山陰です。さきごろ、旅立たれた水木しげるさんとは、2015年7月に美保関でお会いしたのが最後になりました。その際、「小泉八雲さんと私の共通点は、山陰の神秘性に魅かれたこと」「とりわけ島根半島の日本海側は靈性が強いね」そんなことを語っておられました。境港は水木ロードと水木記念館のオープンで文字通り妖怪のまちとして再生し、観光者も県境をまたいで出雲大社や松江と境港を行き来し、山陰の精神文化を楽しむようになりました。

水木しげるさんは、幼年期に「のんのんばあ」と呼ばれる美保関出身の異界の語り部の感化を受けたことはよく知られていますが、松江と縁の深い小泉八雲もアイルランドにいた子ども時代、キャリン・コストロという乳母に妖精譚や怪談を語ってもらったことが、アイルランドの事物を愛する理由だと、晩年、柳田國男の『遠野物語』の執筆にも影響を与えたアイルランドの詩人・民俗学者の W.B. イェイツに告白しています。山陰とアイルランドの地方には、語りの文化という親和性があるのです。

八雲は、松江で士族の娘、小泉セツと出会い日本で 191 番目の国際結婚を果しますが、八雲に「ヘルン言葉」といわれる、ブローケン・ジャパニーズとフォリナー・トークを融合させたピジン言語で、毎夜、超自然的な物語を語ったのはセツでした。本を読もうとすると「本をみるいけません、あなたの言葉、あなたの考えで」と八雲は促

し、口承性を重視しました。山陰地方の民俗誌、ルポルタージュ紀行文である『知られぬ日本の面影』にも、セツの語りから再話された大雄寺の子育て幽霊譚や小豆磨ぎ橋の橋姫の話、松江城や松江大橋の人柱伝説が紹介されています。

そんな怪談を地域の資源と受け止め、松江では2008年から「松江ゴーストツアー」という着地型観光プランを展開しています。春から秋にかけての土曜日に開催していますが、すでに266回、4379人の方が楽しめました。(2015年11月末現在) 八雲を魅了した松江の怪談ゆかりの地を、夜間、語り部の案内で2時間かけて歩くツアーです。当初は、地域の方たちが、地元の再発見と評価しましたが、今は8割以上が県外からの参加者です。八雲のゆかりの地であるアイルランドのダブリンやロンドンのテムズ河岸のエンバークメント地区、ニューオーリンズのフレンチ・クォーターはいまやゴーストツアーのメッカとして注目され、ともすれば負の遺産と考えられてきた怪談が地域活性化に大きな役割を果たしています。晩年、八雲は「超自然の物語には真理があり、その真理に対する人間の関心は、何百年たとうが不変だ」と語りました。その予言は必ずしも誤ってはいなかったことを、いま、実感しています。

超自然の物語を地域の宝と考えることは、人知を超えたご縁の力を大事する精神にも通じます。みなさまにもこの山陰の地で多くのよきご縁をつくっていただければと願っております。



小泉八雲像

小泉凡(こいずみ・ぼん)氏 小泉八雲記念館顧問、焼津小泉八雲記念館名誉館長、小泉八雲曾孫